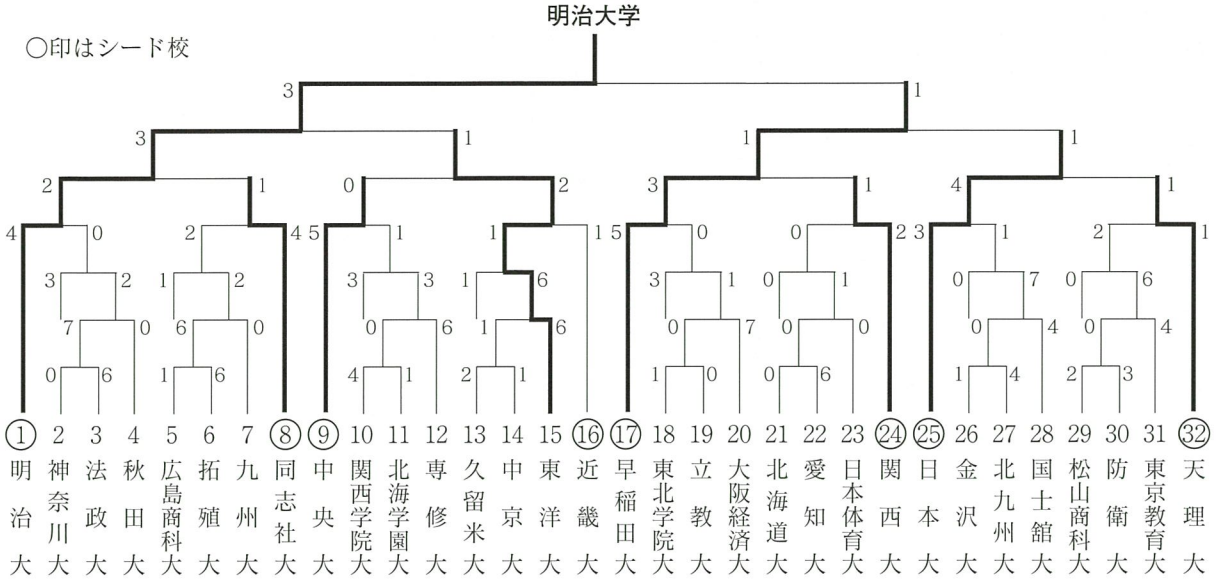


東洋大と近畿大戦は1－1、代表戦の結果、東洋大が勝って準決勝に進出。準決勝の早大と日大戦も1－1、内容点で早大が勝つ

全日本学生選手権重量級優勝の上野武則

第16回全日本学生柔道選手権大会

11月8日　大阪市立中央体育館

優勝　坂口（無差別級）　上野（重量級）

無差別級

〔準決勝〕

坂口征二○　払　腰　松波博治（同大）

青井　聳○　優勢勝　川柄光博（法大）

〔決勝戦〕

坂口征二○　袈裟固　青井　聳（法大）（明大）

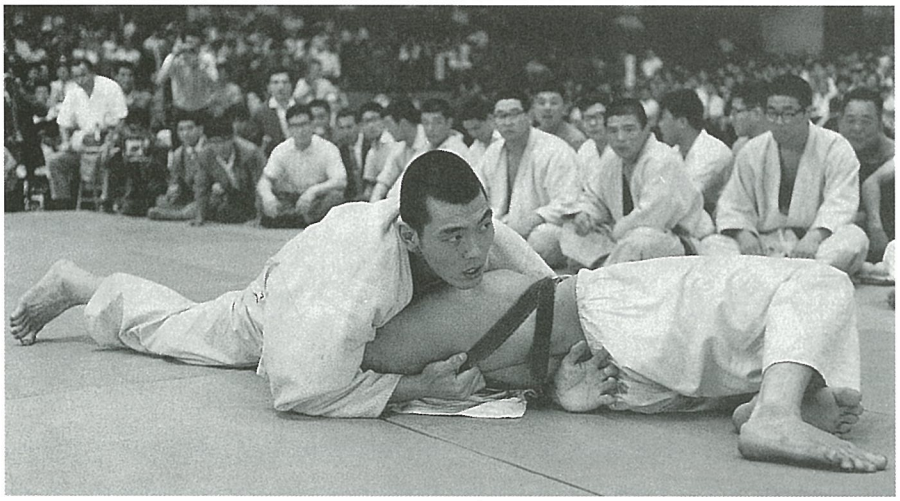
坂口右、青井左、青井先ず大内、体落の変化で攻める。中盤青井、坂口の思い切った内股をすかし体落に変化して技有りとする。満場騒然となるが、坂口この機をとらえて寝技に入り満身の力でがっちりと固めて優勝。

重量級

〔準決勝〕

上野武則○　優勢勝　三上和広（東洋大）（明大）

中野忠光○　優勢勝　村井正芳（明大）（近大）



学生選手権無差別級優勝の坂口征二

〔決勝戦〕

上野武則○　優勢勝　中野忠光
（明　大）　（近　大）

両者共に慎重「時間」となり判定の結果「引分」「延長」となる。延長戦に入り双方活発に攻めるがきめ手が無く時間となるが、結局、前半中野の払腰を後腰でつぶした技の効果を採り上野に旗が上がる。

全日本柔道選手権大会

4月29日　東京体育館

神永三度目の優勝、二位坂口！

〔決勝戦〕

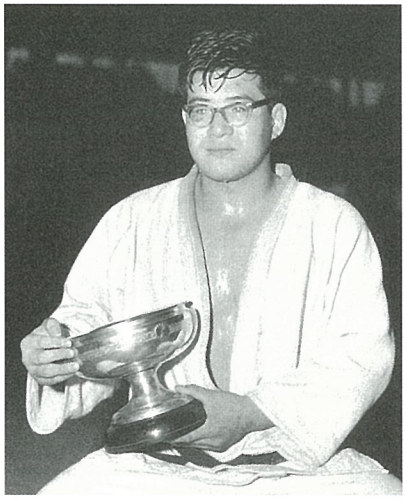
神永昭夫○　小内刈　坂口征二
（富士製鉄）　（明　大）

明大同士の同門対決となった。進境著しい坂口、臆するところなく先輩神永の奥襟を取り、大外、払腰と攻め場内を沸かせる。三分、坂口の攻勢を捌いた神永、体落の流れから小内刈に変化すれば坂口倒れ、三回目の優勝を達成。

全日本選手権大会出場者

神永昭夫、比嘉良幸、重松正成、佐藤治、田中章雄、高田誠之助、田村興靖、関勝治、坂口征二、村井正芳、鳥海又五郎

尚、村井、佐藤、重松、田村はベスト8。



3度目の優勝杯を手にする神永昭夫

東京オリンピック
10月20～23日　日本武道館

金　中谷雄英　　銀　神永昭夫

柔道がついにオリンピックの競技種目となった。柔道のエポック・メーキングである。意義深い本大会の代表に明柔から神永昭夫と中谷雄英が選ばれた。

軽量級に出場した中谷は全試合に一本勝ちして、オリンピックの金メダリスト第一号に輝いた。

無差別級に出場した神永の決勝の相手は、世界選手権大会チャンピオン、アントン・ヘーシンクとなったが、実力者ヘーシンクの壁は厚く銀メダルに終った。

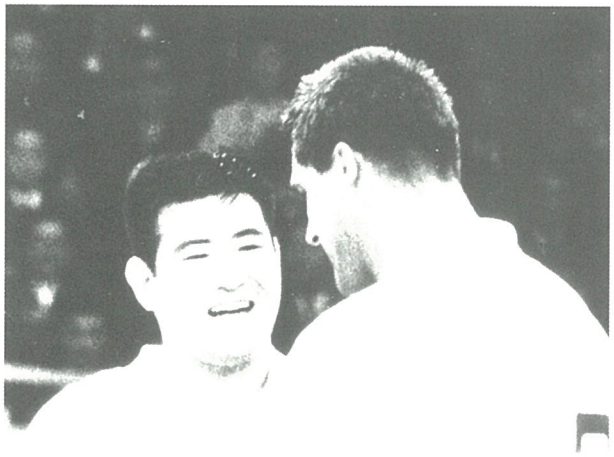
〔決勝戦〕

軽量級（68kg以下）
中谷雄英（明治大学）○　小外刈　エンニ（スイス）

中量級（80kg以下）
岡野　功（中央大学）○　背負投　ホフマン（西ドイツ）

重量級（80kg超）
猪熊　功（順天教員）○　技有り　ロジャース（カナダ）

無差別級
ヘーシンク（オランダ）○　袈裟固　神永昭夫（富士製鉄）



宿敵ヘーシンクとの対決後、握手する神永。全力を尽くした後のさわやかな笑顔。神永は「決して体力負けしたのではない」とヘーシンクの強さを認め、ヘーシンクもまた神永の力を認め、二人の交友は以後も続いた

閉会式

宮　柊二

第十八回東京オリンピック大会は終わった。いまテレビで見終えた。私は急ぐ仕事のために閉会式には行けず、夜十時から、テレビがビデオ・テープで流す実況放送を見たのである。

感動した。中でも心うたれたのは国旗が入場したあとに続いた選手団の入場だった。各選手が相混じり、なごやかに絶ゆることなく続いた。開会式では、各国別に選手団が隊を組み威儀をただし整然と入場したのだったが、閉会式では全く違っていた。各国選手が混じりあい、肩を組みあい、観衆に手をうち振り、あるいは選手同士で談笑しつつ、あるいは感動で踊るように、千様万態の雑然たる進行ながら、そこにはオリンピックの標語のような、世界が一つに溶けあった調和があった。

そうした選手団の先頭には、日章旗をささげて、日本の水泳の福井選手がいた。日本選手団は最後尾の入場だから、福井選手は全選手団の誘導といった形で、外人選手団の先頭を進んだわけだが、いつの間にか、外人選手は福井選手を肩ぐるまに乗せていた。そして右隣にいた外人選手は、福井選手の右手を両手でささえあげてやった。左隣の一人は、旗ザオを握る左手に力を貸してやっていた。うしろの一人は、両手をのべて、福井選手のおしりをささえてやっていたようだった。福井選手の前後左右を、他の外人選手は守り、取り巻くように歓喜の表情で囲みつつ進んだ。そのあとを、前述したような格好で、いつ果つるともなく外国選手団が続くのであった。

私はオリンピック開催日に委嘱されて、数首の歌を詠んだ。

秋ふかむ日本の空あかあかと
　オリンピアの火むらだちて燃ゆ

新しき古き国ぐに旗すべて
　未来を示し飜り鳴る

よろこびの空の羽音
「種の別」のあらぬ祭に鳩群れて翔ぶ

というのはその一部である。ほんとうに、澄み深んだ日本の秋空のもとに、はるばると運ばれてきたアテネの聖火が赤々と燃えた。歴史古き国、独立新しき国々の、それぞれの輝かしき未来を象徴しつつ翻る旗のもとに、九十四カ国の選手が整列した。放たれた一万羽の伝書ばとは、乱れ光り、いつまでもいつまでも羽音を空にひびかせた。その音は国境、宗教、習慣、大きく言えば「種族」の別などを全く無くした大歓喜が開かれてゆくのを、たたえてやまぬように聞こえた。ワザを競うとはいう。たたかうともいう。しかしそれは戦争ではない。戦争がいまアジアの一角に現にある。戦争が出現するようなふんいきが世界のどこかにある。それはいけない、そう語りかけてもいるような羽音であった。

閉会式前日の二十三日には、柔道試合を私は見にいった。この日は、無差別級の試合が行われたのだが、敗れた神永選手は、私がかつてサラリーマンだった時代の、若い同僚だった。学生のころから、入社するときから私は知っていた。それは、日本柔道選手団の強化コーチの曾根六段が、神永選手の先輩であり、また神永君の先に私の若い同僚となってもいたからである。曾根君は、私が牟礼のこの家に引っ越すとき、今はなくなった私の老病父を、まるでこわれもののごとく、そのたくましい両腕にささげあげるように古い家から運んでくれた。父は重病で衰えきっていて

少しの動揺を与えてもならない状態であった。私の引っ越しを手伝ってくれる同僚たちが、この老父のことを案じたのだが、曾根君がたくましい腕で安らかに運んでくれた。新しい家の病床に静かに、曾根君の腕が父をおろしたとき、老病父は感謝の涙をうかべながら曾根君を見上げていた。

そうした曾根君、その曾根君が日本の柔道界の首座を守りうる後輩として、愛した神永君である。私は二人の人間も性格も知りつくしていた。パリでヘーシンクに敗れたあと、いかにその世界の王座を取り戻すかについて、このふたりがどのように語り合い、どのように準備し、どのような修練を積んできたかも多少は知っている。しかし勝負後の今だが、あからさまに言ってみれば、私は「神永君はヘーシンクに勝てないのではないか」と思ってきたのだった。いまの試合規定で勝負をやるには、ヘーシンクと神永君とはあまりに体力が相違している。そうであっても、神永君はヘーシンクの相手とならなければならない運命にあった。そういう成り行きというものはあるものだ。

私は何かに書いたことがある。先に安からぬ運命が見えていても踏み入らなければならない世界があり、またそこに全力を投じなければならぬ義務がある。さらにその運命に立ち至っても悲しみとして見せてはならないものが、男の世界にはあるものだ、というようなことを。

神永君が全力を尽くして敗れたときの、その姿を私は観覧席から注目していた。神永君は悲しみを見せなかった。決して悲しくないのではない。見せなかったのである。それが私にはわかる。勝ったヘーシンクも堂々たる王者の貫禄があってりっぱだったが、敗れた神永君の人間の深い姿を、私は息をつめて見まもっていた。

閉会式を進む選手団の中に、神永君をもう一度見たいと思った。しかし、テレビ画面は神永君をとらえてはくれなかった。〔10月28日〕

注　岩波書店版『宮　柊二』全集より転載

東京オリンピック日本選手団の入場行進

第14回全日本学生柔道優勝大会
6月19・20日　東京体育館

明治五連覇成らず

〔準決勝戦〕

明治大学　1―1　天理大学

（内容勝）

山本裕洋　引　分　湊谷　弘
北瀬暁一　引　分　笹原富美雄
佐々木　満　引　分　妻鳥憲二
富田弘美　優勢勝　○山中圏一
坂本羯正○　支釣込足　川柄光博
松山正勝　引　分　平尾勝司
上野武則　引　分　吉田光男

先鋒山本右内股で跳ね上げるも引手不十分、湊谷も左内股、大内とよく攻めるが共に決め手なく引分、北瀬引分の後、佐々木取る気十分だったが妻鳥の守りが堅くこれも引分に終る。富田、背負投に出るところを返されて技有り、一点を失う。坂本、川柄ともにガッチリと組み合う。開始間もなく坂本得意の右払腰を放てば川柄きれいに飛ぶ、しかし判定は場外、坂本さらに川柄の足払い返して技有り、中盤あせって出る川柄の攻め足をとり、残った足を払えば鮮かな一本となる、坂本の圧勝。一対一の接戦に場内の熱気が高まる。しかし、松山、平尾の試合運びは共に慎重で引分、上野状況を見て慎重に守りを堅めれば吉田なすところなく引分。明治の決勝進出決定。

拓殖大学　2―1　近畿大学

〔決勝戦〕

拓殖大学　1―0　明治大学

伊藤博康　引　分　山本裕洋
高橋久雄　引　分　佐々木　満
安斉悦雄　引　分　坂本羯正
D・ロジャース○　崩袈裟固　富田弘美
矢田健次郎　引　分　北瀬暁一
岩釣兼生　引　分　松山正勝
田畑俊弘　引　分　上野武則

優秀選手　明治大学　坂本羯正
拓殖大学　D・ロジャース
田畑俊弘
天理大学　山中圏一

第17回学生柔道選手権大会
11月6日　大阪府立体育館

山本無差別級を制す

近畿大学　香月光英

無差別級

山本裕洋○（明大）　技有り　川端智幸（天理大）

川端は左内股、山本は右大外、互に試合場一ぱいに使っての攻防。ややあって山本の大外を川端辛くも場外に逃れた直後、山本再度の大外刈強襲、川端後腰に抱き上げようとしたが、時すでにおそく、がっぷりと体をあずけられて仰向けに転倒、技有りとなる。山本はなおも攻撃の手をゆるめず、払腰、大内に攻めたてれば、川端も逆転の機を狙って組みぎわの腕挫、さらに双手刈りと奇襲するが効果なく山本の優勝が決定する。

全日本団体選抜柔道選手権大会
11月14日　愛知県体育館

優勝明治大学　二位警視庁

古賀　武○　優勢勝　佐藤　治
松坂　猛○　優勢勝　田中章雄

〔準決勝戦〕
坂口征二○　優勢勝　前田行雄
松坂　猛○　優勢勝　古賀　武

〔決勝戦〕
坂口征二○　優勢勝　松坂　猛

延長二回戦、坂口は小外、内股、払腰と俄然攻勢に転じ松坂の体何度も崩れる。二度目の延長戦、松坂もっぱら防御に回る。坂口の攻めはいずれも有効にはならなかったが、それに近い効果を見せ判定は坂口に。

全日本選手権大会出場者
重松正成、佐藤治、神屋興介、田中章雄、石原賢信、坂口征二、関勝治、積田勝、村井正芳、山本忠夫、上野武則、田村興靖

全日本柔道選手権大会
5月1・2日　日本武道館

坂口初優勝

昭和四十年度全日本柔道選手権大会は五月一日、二日日本武道館で開催された。

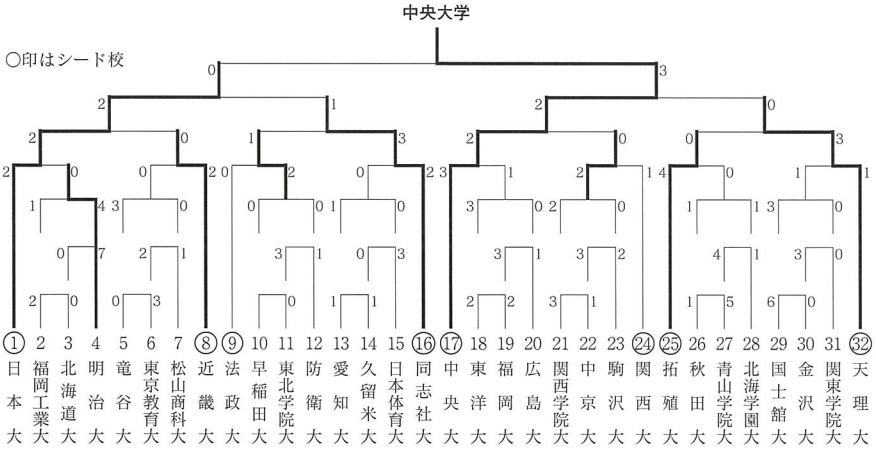
予選各組を勝ち上がり、準々決勝（決勝トーナメント）に進出したのは坂口、関、田中、佐藤、積田の明大勢と、前田、古賀、松坂。村井は同組の松坂と同率であったが、トーナメント進出決定戦で松坂に敗れ、惜しくも準決勝進出はならなかった。

〔準々決勝戦〕
坂口征二○　優勢勝　積田　勝
前田行雄○　優勢勝　関　勝治

全日本選手権大会に出場した明大勢

第15回全日本学生柔道優勝大会
6月18・19日　日本武道館

不振、四回戦で敗退



第18回全日本学生柔道選手権大会
11月5日　大阪府立体育館

主　将　山本連覇（無差別級）
一年生　須磨も勝つ（重量級）

重量級

〔準決勝戦〕
須磨周司○　内股　青井　聳（明大）（法大）
笹川正明○　優勢勝　松波博治（東洋大）（同大）

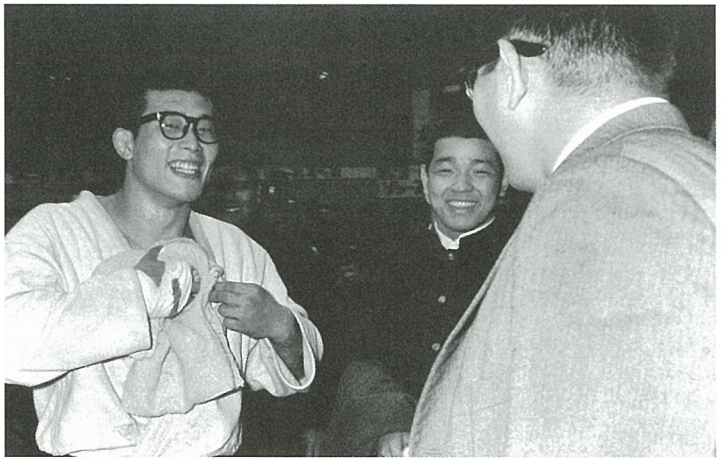
〔決勝戦〕
須磨周司○　背負投　笹川正明（明大）（東洋大）

須磨右に構えじりじりと押し立てる。笹川負けじと前に出ようとする出鼻を須磨すかさず体を沈めて左背負にかつげば笹川の体が空を切って一転、正に美技。時間一分と少し。準決勝の対青井戦といい、また決勝戦の内容といい須磨の技の巧みさはとても一年生のものとは思えない。

無差別級

〔準決勝戦〕
妻鳥憲二○　優勢勝　湯浅政一（天理大）（明大）
山本裕洋○　大外刈　中村義信（明大）（同大）

〔決勝戦〕
山本裕洋○　優勢勝　妻鳥憲二（明大）（天理大）


無差別級優勝の山本裕洋

山本右大外刈に出るところ妻鳥はずして内股に入り山本横転、主審最初場外としたが副審場内のジェスチャーで技有りを宣告。山本憤然として反撃に次ぐ反撃、妻鳥は守勢一方となる。山本の反撃はなおも続き、遂に大外巻込みで技有りをとり返したところで時間となり引分け、延長戦となる。延長戦も山本の攻勢が大きく上回り、判定は山本に上った。山本のファイトが連続優勝の偉業を成し遂げた。

超重量級　二位　安斉泰人（明　大）
　　三位　篠巻政利（明　大）
無差別級　三位　湯浅政一（明　大）

全日本柔道選手権大会
4月30日・5月1日　日本武道館

坂口準優勝

今大会、坂口と優勝した松永満雄は三度対戦した。その結果は、

〔二次リーグ戦〕

松永満雄　引　分　坂口征二

〔組順位決定戦〕

松永満雄○　優勢勝　坂口征二

〔決勝戦〕

松永満雄○　合せ技　坂口征二

坂口が小内刈から大内刈と間断なく攻めるが、松永、守りを固め防戦。坂口、なお繰り返ししかけるが決定打なく引き分け。

（延長戦一回目）

組んだあと、坂口の大外刈がきれいに決まったかに見えたが、場外の判定。両者決定打なく引き分けとなる。

（延長二回目）

前半、両者疲労のためか動きがにぶい。再び引き分けとなる。

（延長三回目）

坂口が内股で攻めれば、松永も内股で攻め返す。松永はよく動いて相手を誘い積極的に試合を進める。坂口、松永の動きを捉えて内股に飛び込めば、松永、大きく傾いたが場外に逃れる。数合して五分経過、坂口が内股に入れば、松永は相手の後ろ腰につこうとする。坂口が支え釣込み足に変化しようとするところを、松永が支え釣込み足に変化しながらもたれかかれば、これがよく効いて技有り。坂口、内股に強襲すれば、松永は再び相手の後ろ腰につきながら小外掛けを放ってあびせれば、坂口の巨体ははずみをつけて大きく仰転。技有りとなり勝敗が決する。

全日本選手権大会出場者

重松正成、田中章雄、田村興靖、佐藤治、関勝治、中谷雄英、村井正芳、坂口征二、鳥海又五郎、上野武則

世界大学柔道選手権大会
6月23～25日　チェコ・プラハ

篠巻二階級を制す

〔決勝戦〕

93kg超級

篠巻政利（明　大）　脇　固　グッソ（ソ　連）

無差別級

篠巻政利（明　大）　上四方固　笹原富美雄（天理大）

第16回全日本学生柔道優勝大会

6月24・25日　日本武道館

準決勝で破れる

東洋大を4―0、近畿大を4―1と倒し順調に勝ち上がったが、準決勝拓大戦は同点内容負けの惜敗、優勝の望みを絶たれた。

〔準決勝戦〕

拓殖大学　1―1（内容負）　明治大学

伊沢　勉　引　分　岡　義徳
田畑三明　引　分　篠巻政利
徳永照夫　引　分　須磨周司
西村昌樹○　合せ技　安斉泰人
安斉悦雄　引　分　北瀬暁一
阿部正彦　技有り○　小村和紀
馬籠郁雄　引　分　湯浅政一

一点を背負った明治、副将小村の左体落がきまり、かたずを呑んだが技有りに終る。大将戦、湯浅の攻めに馬籠守勢一方で〝注意〟を受ける、その後の流れも馬籠の引分け戦術が功を奏して引分け、無念の敗退。

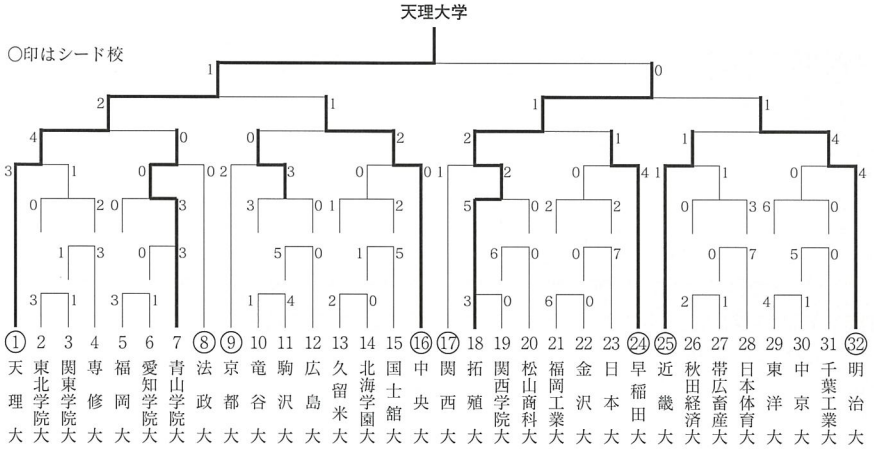
天理大学　2―1　中央大学

〔決勝戦〕

天理大学　1―0　拓殖大学

優秀選手（関係分）

明治大学　小村和紀



第19回全日本学生柔道選手権大会

11月4日　大阪府立体育館

重量級　篠巻優勝

重量級

〔決勝戦〕

篠巻政利○（明大）　優勢勝　徳永照夫（拓大）

○軽量級二位　須磨周司
○軽量級三位　葉山義光

全日本選手権大会出場者

佐藤幸二（三位）、佐藤　治、中谷雄英、田村興靖、山本裕洋

ユニバーシアード東京大会

柔道競技　8月27～30日　日本武道館

篠巻無差別級優勝

無差別級

〔決勝戦〕

篠巻政利○（日本明大）　大外巻　金　照忠（韓国）

明大の技
篠巻政利の内股

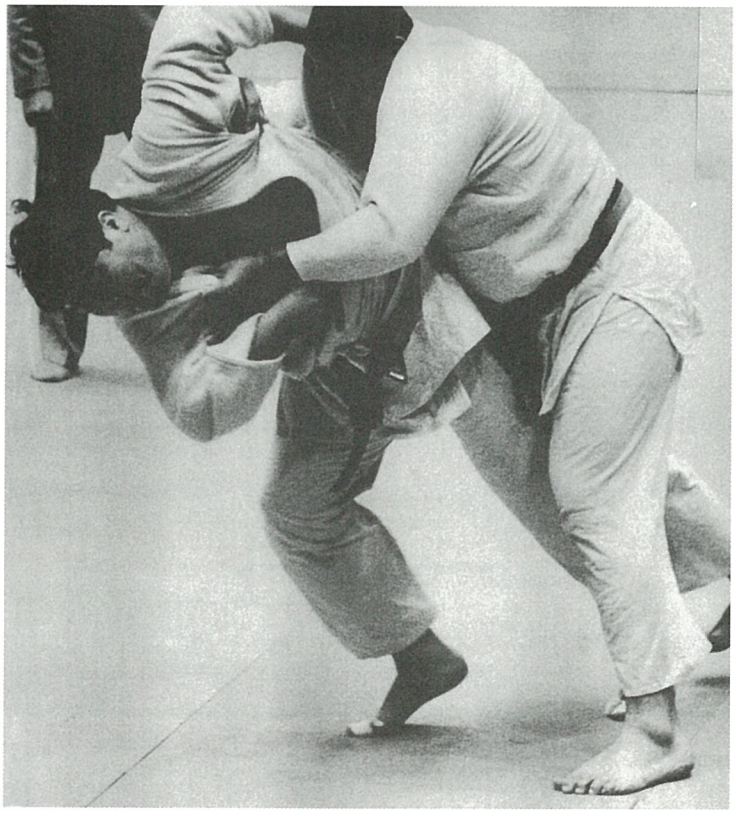
篠巻は、数々の大試合を制した左大外刈を持っている。故に、篠巻の技を語る時、それぞれの好みもあって、彼の柔道を印象づける技が、大外刈か内股か、意見の分かれるところとなっている。

彼の場合、選手生活の前・中半は内股を、後半は大外刈を中心に技を組みたてていたようだった。

そこで表題の「内股」の解説という事になるのだが、「篠巻の内股は基本にかなった正攻法の技であった」の一言ですべてが言いつくされてしまう。あえて続けるならば、「詳しくはテキスト柔道、内股のページを参照の事」となる。そんな訳で世界チャンピオンで内股の篠巻と言われながら、その技に素人衆が喜ぶような伝説的？　な特徴はない。

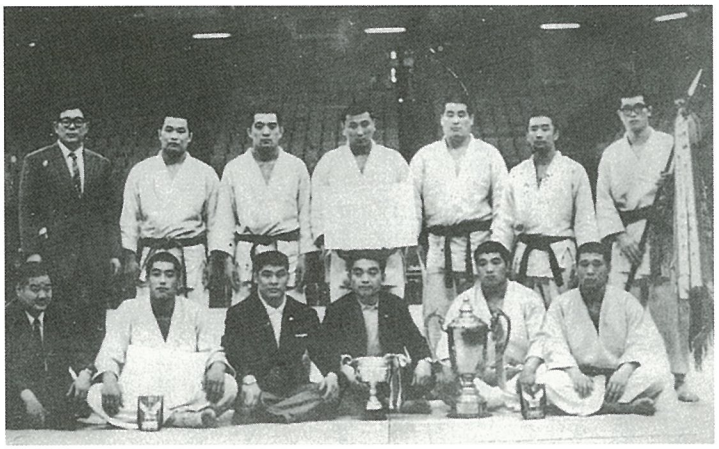
重量級の柔道はどうしても体格的特徴をフルに生かした技が主流になってしまう。体の特徴を生かした技を身につけるのは至極当然の事であるが、斜に見ると「あの体がなかったら…」ということにもなる。篠巻も一一〇kgを越える体重であったが、引き出してかける時でも、追い込んでかける時でも「掛け」に至る「つくり」は投の形に見る内股の理をはずしていない。

一流選手にはその人ならではのオリジナリティに富んだ組みかたや、掛けかたがあるものだが、内股に限らず、篠巻の技は誰もがやって来た基本を積み重ねた極く地味でがっしりしたものであり、房総の海で鍛えた心肺の強さと、重量級らしからぬ柔軟な体質は、外柔内剛の性格にまって篠巻の柔道として開花した。柔道のスタイルはオーソドックス、センスは非凡、これが篠巻の柔道の特徴である。


篠巻の豪快な技

第17回全日本学生柔道優勝大会
6月15・16日　日本武道館

明治十回目の優勝


4年ぶりの優勝をはたした明大チーム

〔決勝戦〕
明治大学　3―0　早稲田大学
河原月夫　引　分　小野沢弘史
須磨周司○　内　股　高橋良雄
小谷利夫　引　分　許　利彦
岩田久和　引　分　中川良夫
篠巻政利　引　分　此松孝一
安斉泰人○　内　股　友成章一
岡　義徳○　大外刈　樗沢憲昭

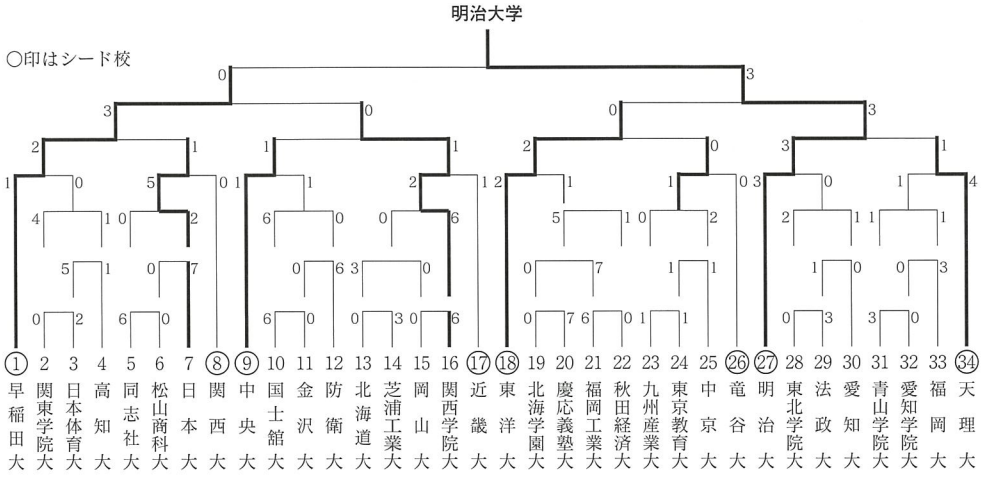
河原左、小野沢右、ともに慎重、組手争いに終る。高橋の大内刈須磨の返しに危かったが、よく残す、高橋間断なく攻めたが終了間際須磨の内股がきれいにきまって一本、明治一点先取。

許、払巻き込、小谷大外刈と両者威力のある技の応酬、見ごたえのある試合であったが引分。

早大のエース中川は一本をとってタイとしたいところだが、岩田は先ず双手刈、巴投を連発して寝技にもち込む、中川これをきらうと岩田今度は小内刈、一本背負と攻めまくり、中川に仕掛けるチャンスをあたえず引分。

篠巻左、此松右、篠巻大外刈に出れば此松これを返えそうと大技同士の力の入った試合となる。篠巻よく攻めたが此松も堂々とわたりあって引分。

挽回をはかる友成の必死の攻めが功を奏して体落しが技有となる。安斉小内、内股で反撃すれば右のケンケン内股に友成こらえきれず背中から落ちて逆転の一本、この瞬間十回目の優勝が決った。大将戦、樗沢一矢を報いんと盛んに攻めるが岡の防御は固く、逆に樗



沢の動きが止った一瞬をとらえた内股に樗沢の体が宙に舞って一本。明治四年ぶりの優勝。

優秀選手(関係分)

明治大学　篠巻政利
須磨周司
安斉泰人

第20回全日本学生柔道選手権大会
11月4日　大阪府立体育館

明治、無差別級、軽重量級を制す

軽重量級

〔準決勝戦〕

須磨周司○（明大）　内股　岩田久和（明大）

河原月夫○（明大）　優勢勝　岡　義徳（明大）

〔決勝戦〕

須磨周司○（明大）　横四方固　河原月夫（明大）

軽重量級は明大四人が準決勝に進みそれぞれ先輩後輩の対戦となった。

決勝は後輩の河原が中盤まで大外、背負とよく攻めたが五分すぎ河原の背負投を須磨崩して寝技に入り横四方に抑えた。三位は岡。

無差別級

〔準決勝戦〕

篠巻政利○（明大）　袈裟固　馬籠郁雄（拓大）

増田正彦○（中大）　大内刈　初田弘宣（竜大）

〔決勝戦〕

篠巻政利○（明大）　横四方固　増田正彦（中大）

篠巻も大きいが増田はより巨体、双方がっぷり組んで動かない。漸く増田が動き強引に内股にくるところを篠巻崩して寝技に持ち込み難なく抑え込んだ。

全日本選手権大会出場者

関勝治、佐藤幸二、村井正芳、中谷雄英、上野武則、山本裕洋

世界学生柔道選手権大会
9月6・7・8日　ポルトガル・リスボン市

須磨　二冠！

重量級

〔決勝戦〕

須磨周司○（日本明大）　背負投　グラーム（アメリカ）

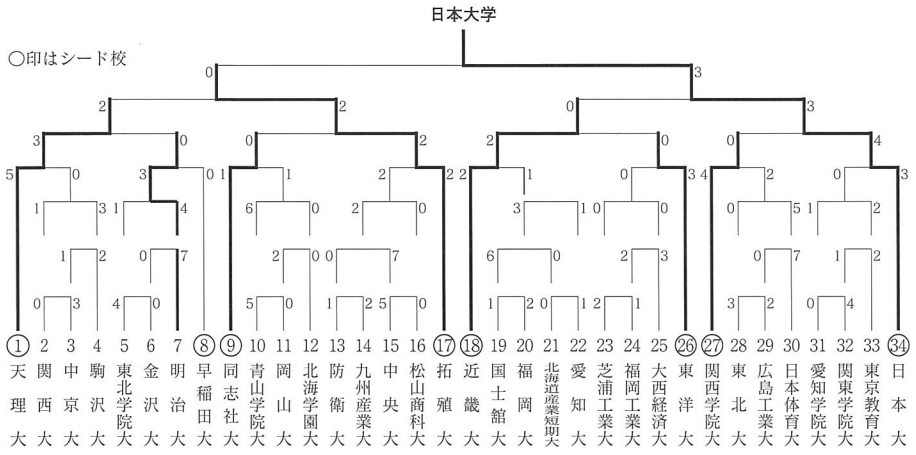
無差別級

〔決勝戦〕

須磨周司○（日本明大）　優勢勝　中川良夫（日本早大）

第18回全日本学生柔道優勝大会
6月14・15日　日本武道館

準々で天理に苦杯



金沢大を七対〇、東北学院大を四対一で破り、早稲田大も三対〇で撃破し準決勝に進出した。しかし、準決勝の天理大戦では、主将の須磨周司も敗れる不調で、三対〇で完敗した。

第21回全日本学生柔道選手権大会
11月3日　大阪府立体育館

河原二位

選手権試合の部（無差別級）
本大会より無差別級の試合を「選手権の部」と呼称。

〔準決勝戦〕
河原月夫〇　崩上西方固　上口孝文（日大）
（明大）
正木照夫〇　大外刈　高木長之助（日大）
（拓大）

〔決勝戦〕
正木照夫〇　優勢勝　河原月夫（明大）
（拓大）

延長戦を含めて死闘二十分、正木の大内刈に河原ころびポイントとなる。

第6回世界柔道選手権大会
10月20～23日　メキシコ

篠巻、須磨、世界の頂点に立つ

重量級
〔一回戦〕須磨周司（日本明大）　横四方固　キブロサビル（ソ連）
〔二回戦〕須磨周司（日本明大）　釣込腰　ゴメス（ドミニカ）
〔三回戦〕須磨周司（日本明大）　釣込腰　デワンデイラー（デンマーク）
〔四回戦〕須磨周司（日本明大）　優勢勝　グラーン（西ドイツ）
〔準決勝〕須磨周司（日本明大）　袈裟固　松永満雄（日本）
〔決　勝〕須磨周司（日本明大）　背負投　グラーン（西ドイツ）（敗者復活）

無差別級
〔一回戦〕篠巻政利（日本富士製鉄）　棄権　クライノビッチ（ユーゴ）

〔二回戦〕 篠巻政利（日本富士製鉄） 大外返 ルスカ（オランダ）
〔三回戦〕 篠巻政利（日本富士製鉄） 優勢勝 鄭三鉉（韓国）
〔四回戦〕 篠巻政利（日本富士製鉄） 優勢勝 ギブロサビル（ソ連）
〔五回戦〕 篠巻政利（日本富士製鉄） 合せ技 グラーン（西ドイツ）
〔準決勝〕 篠巻政利（日本富士製鉄） 優勢勝 ユーグスター（オランダ）
〔決勝〕 篠巻政利（日本富士製鉄） 優勢勝 ルスカ（オランダ）（敗者復活）

須磨元気一ぱい、オナシビリ（ソ連）に負け、敗者復活で上ってきた松永を袈裟固で破り、決勝では再びグラーンと対戦したが、徹底的に攻めまくり三分二十三秒、豪快な背負投でグラーンの長身を一転させた。重量制が採用された第四回大会以来、日本は初めての重量級で優勝を遂げた。

二回戦の篠巻対ルスカは、互に慎重、漸くルスカが先行し右大外刈に行けば、篠巻のふんばりにルスカの腰が浮く、この機をのがさず篠巻引き上げるように跳ね上げで返せば見事に決る。小さな応酬はなく唯の一発で勝負がついた。決勝の篠巻、敗者復活で上ってきたルスカと再び戦う。ルスカが体落に出るところを篠巻大内刈から気合を入れて押し倒すとこれが技有りとなる。その後も篠巻守りにたたず攻勢を保って時間となる。

全日本選手権大会出場者

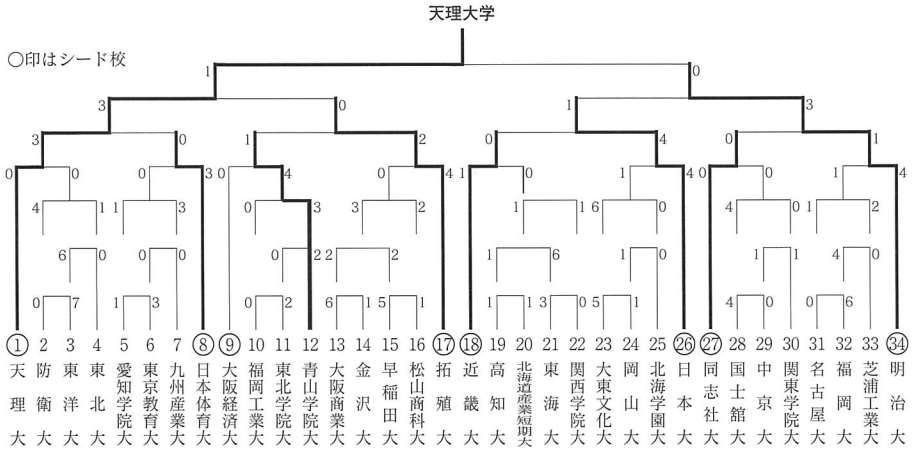
朝田紀明、篠巻政利、佐藤幸二、上野武則、村井正芳（三位）、北瀬暁一、岡義徳

左背負投と右内股と使い分けた須磨周司

第19回全日本学生柔道優勝大会

6月13・14日　日本武道館

惜敗　準優勝



〔準決勝戦〕

明治大学　3―1　日本大学

重松義成　引分　上口孝文
鮫島俊隆　引分　田中直樹
河原月夫　引分　棟田利幸
岩田久和○　大内刈　村田昭義
加茂博久仁　技有り　○高木長之助
石橋重則○　横四方固　遠藤純男
佐々木　均○　払釣込足　依田　明

重松は左大外、大内、上口は左内股、両者積極的に攻め見ごたえある試合、引分。鮫島の左大外刈は鋭く田中終始防御にまわり引分。棟田立技不利と見たか再三寝技に引き込むが河原嫌う、棟田引込み注意を受けるが引分。村田寝技にもち込もうと岩田の右腰についたところを岩田足をとって大内刈に入れば見事に決る。挽回を期した高木払巻きで加茂を捕えたが技有に終る。石橋、遠藤の払巻きをつぶして巧みに抑える。佐々木の釣込足に依田あっ気なく飛んで一本。

天理大学　3―0　拓殖大学

〔決勝戦〕

天理大学　1―0　明治大学

松室重光　引分　吉永浩二
藤猪省三　引分　重松義成
野村豊和　引分　岩田久和
山家久博　引分　鮫島俊隆
諸井三義○　技有り　石橋重則
松本敏明　引分　河原月夫
花田秀明　引分　佐々木　均

後半に見せた吉永の大内刈、効いたかに見えたが技有りにならず。重松、藤猪両者とも無理な勝負をせず引分。岩田攻勢、組むなり小外刈から押し倒せば野村頭から落ちたが場外。岩田その後も攻めたてるが、野村守り切って引分。

鮫島、山家もよく攻め合ったが引分。

後半諸井の内股に石橋倒れて技有りを失う。副将河原、大将佐々木、ともに挽回を期して攻めまくったが、守り切られる。

判定の基準が「技有り」以上であるから、実力伯仲の両校にとって先取点を上げた側が断然優位に立つ。この勝負もその通りになり、河原、佐々木の必死の反撃も及ばなかった。

優秀選手

明治大学　石橋重則
天理大学　諸井三義
天理大学　山家久博
拓殖大学　一戸隆男
日本大学　高木長之助

第22回全日本学生柔道選手権大会
11月7日　大阪府立体育館

選手権の部　河原優勝

〔準決勝戦〕

上村春樹（明大）○　合せ技　石橋重則（明大）

河原月夫（明大）○　技有り　渡辺常雄（中大）

〔決勝戦〕

河原月夫（明大）○　優勢勝　上村春樹（明大）

同門の対決となる。両者終始よく攻めたが共にポイントとなる技はなく判定は僅差で河原に上る。

二位　中量級　重松義成（明大）
三位　軽量級　川口孝夫（明大）

全日本柔道選手権大会
4月29日　日本武道館

篠巻（新日鉄）初優勝
決勝は後輩河原（明大）と

〔準決勝戦〕

篠巻政利（新日鉄）○　大内刈　安斉泰人（倉レ）

河原月夫（明大）○　優勢勝　園田勇（丸善石油）

〔決勝戦〕

篠巻政利○　技有り　河原月夫

明治の同門対決となる。左組ガップリとなるが後輩、河原の攻めにいつもの迫力がない。三分すぎ、河原の出ばなを篠巻、釣込足に捻って技有り。中盤以後、篠巻、河原の動きを読み寝技も交じえ優勢に試合を運んで時間となる。

天皇杯は篠巻に輝いたが、学生河原の健闘は壮快だった。全日本選手権の同門決勝対決は昭和三十九年の神永（新日鉄）対坂口（明大）以来。

全日本選手権大会出場者

安斉泰人（準決勝進出）、小村和紀、小谷利夫、佐藤幸二、上野武則、河原月夫、篠巻政利

全日本ジュニア選手権大会
4月26日　講道館

川口優勝

第一回の全日本ジュニア選手権大会が四月二十六日講道館で行われ、軽量級で川口孝夫（明大）が優勝した。

明大の技
国安教善の支釣込足

支釣込と大内刈はポピュラーな技で稽古や試合でよく見られる。

きまり技としても多いが、両技とも連絡技の要で、支釣込↑↓大外刈、大内刈↑↓体落、の

組み合わせは代表的な連絡技だ。

明柔史上でも著名選手はみなこの技をこなしている。小川直也もこれを得意としており、大外刈との連係は強力である。

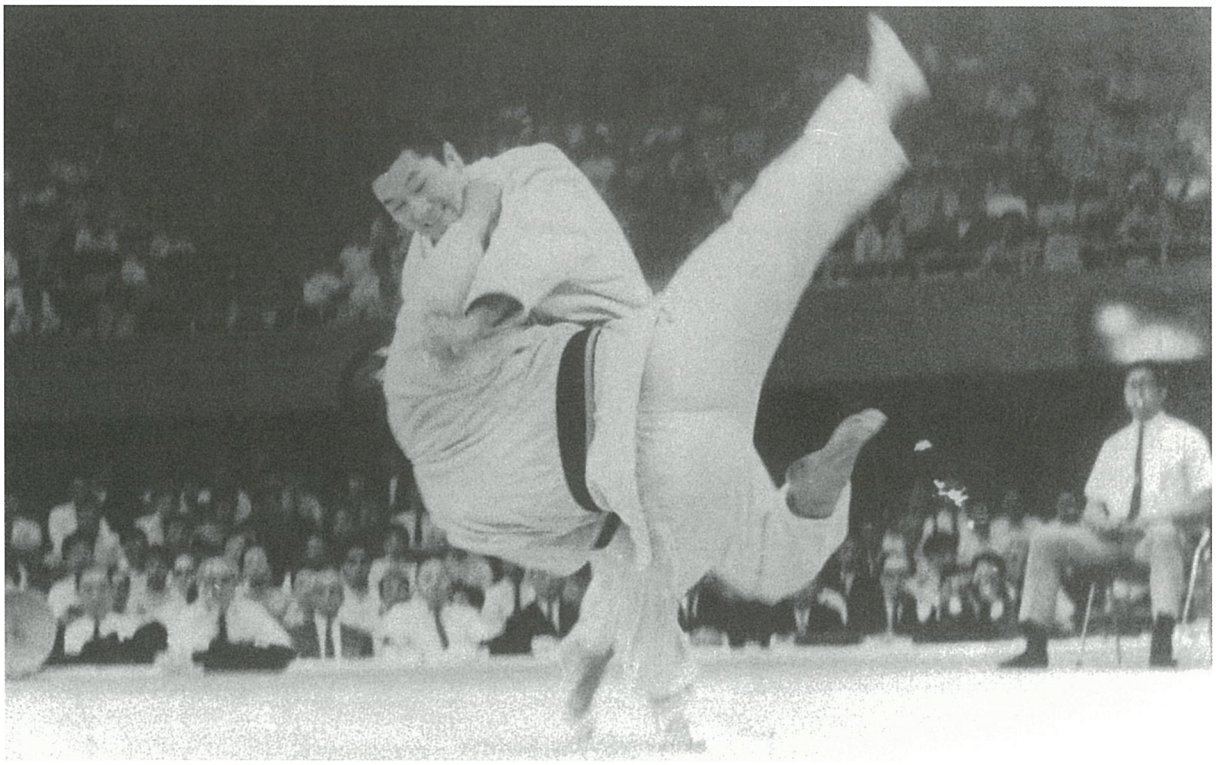
しかし、支釣込足といえば先ず思い出されるのは国安均（旧姓、佐々木）である。

この技を得意とする人はたいてい他の技と組み合わせて自分の技にしているが国安の場合は無器用？　が幸いしてか形どおりの崩しでいわばストレートに決めていた。

昭和四十五年の全日本大学生大会の日大戦で、巨漢の依田選手がこの一発支釣込足で宙に舞ったのだが、あまりの美技に会場が一瞬静まりかえった。

連絡技としては大内刈で追い込み、引きもどして釣込足に変化するという高度なテクニックを練習していた。もちろん決まれば巧技そのものだが、ひとつタイミングがはずれると、強烈に向こうずねをけることになる。馬力があるだけに相手にとってもこれもまたこたえる技であった。

国安はたしかに力持ちで、釣込む腕力は並はずれていたが、足腰の使い方がうまく丁度角力でウッチャリが、決まる時の動作と共通するものがあった。これは実に理にかなった体さばきである。



理にかなった国安の技

河原月夫の内股

相手を畳（大地）から空中に投げ飛ばす技の醍醐味、この素晴らしさは言葉では言い表すことの出来ない、柔道人のみが知るロマンであろう。野球で言えば、ホームランの味であろう。

得意技とは、相手が巨漢であるとか小兵であるとかに関係なく切れ味を発揮する技でなければならない。

得意技は、千日、万日の稽古、研究をしなければ身につかないものである。柔道の技は、崩し、作り、掛け、の三要素を一連の動作で示すことにより成立させるものである。河原の崩しの原点は、相手を爪先立ちにさせることである。

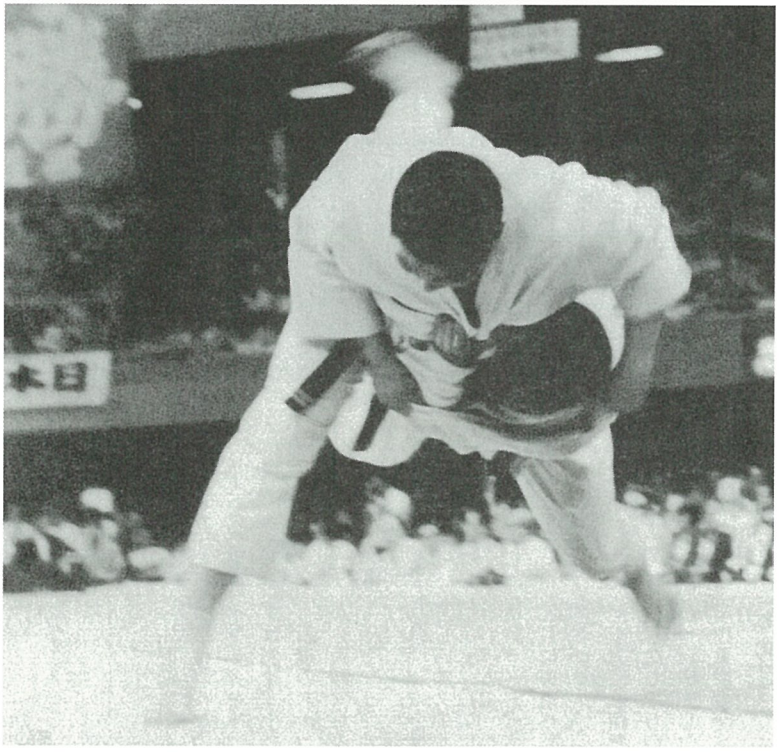
崩しは、自己と相手との力関係を利用することが基本である。自然体でいる人間の上体に前から力を加えれば、その人間は後に倒れまいとして両腕を前に伸ばす、反対に、後から力が加われば後方に両腕を出す。崖に立ったつもりになると分かりやすい。

柔道に限ったことではないが技術の習得は、理論と実践のサンドイッチ方式で可能になる。

理論と実践を常に頭に置き、反復練習を重ねてこそ技術の向上がはかられる。特に瞬発力の重要性を認識し、その養成に努めることである。その人、その人に合った技を創意と工夫をもって研究すれば、必ずや一本を取れる素晴らしい技が生まれるはずだ。

河原の内股の最大のポイントは、相手のスタンスの広さ（長さ）を一辺とした正三角形の頂点にその重心をもっていく崩しにある。

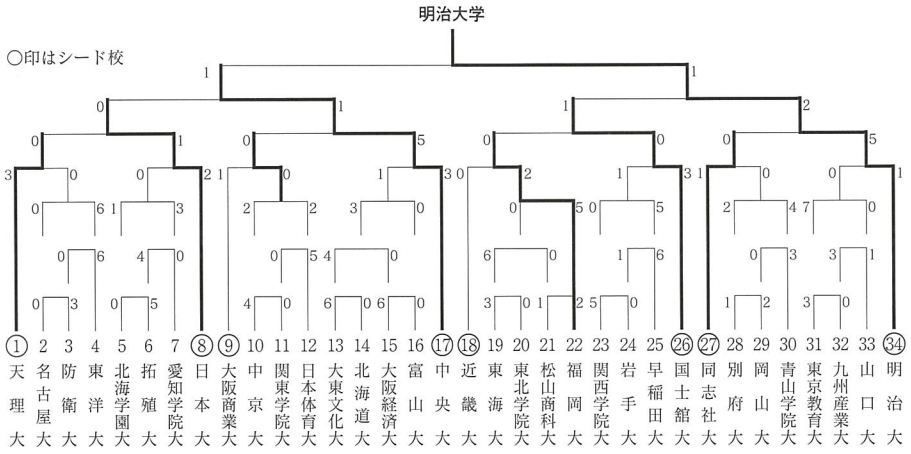
創意の創は、生み出す意味もあるが絆創膏の創、すなわちキズとも読める。自信をもって掛けた「内股」を何度も返されたり、すかされたりもする。しかし「不入虎穴不得虎子」である。思い切りのない技は上達しない。

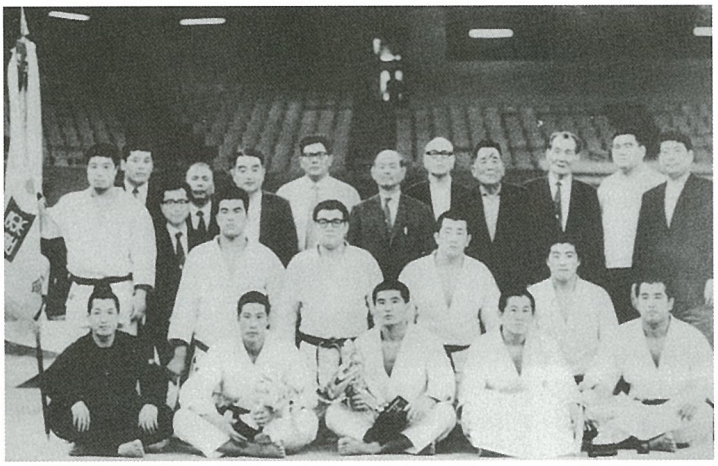


思い切りの良い河原月夫の技

第20回全日本学生柔道優勝大会
6月12・13日　日本武道館

明治十一回目の優勝




11回目の優勝、明大チーム

〔準決勝戦〕

明治大学　2―1　国士舘大学

中央大学　1―0　日本大学

〔決勝戦〕

明治大学　1―1　中央大学
（内容勝）

鮫島俊隆　引分　友松利広
上村春樹　引分　後藤誠一
重松義成　引分　国房隆志
吉永浩二　引分　中川博光
加茂博久仁　引分　浅野隆司
岩田久和○　小外刈　土屋正
原吉実　技有り　○渡辺常雄

鮫島、内股、小内で先ず攻める。友松も奥襟をとって内股を狙うが鮫島ガッチリ受け引分。上村左体落、背負、後藤右内股と攻め合うが共に効なく引分。重松、左大内、大外、また内股と攻めれば国房右半身になって防戦一方、重松なおも攻めたてるが結局ポイントは挙げ得ず引分。吉永中川戦、加茂浅野戦、共に激しい攻防だったが引分に終る。

副将戦、岩田、場外から正面に戻った土屋の虚をついて小外刈を放てば土屋もんどり打って飛び鮮かな一本。俄然優位に立つ。大将戦明治は一年生の原、中央はポイントゲッターの一人で四年生の渡辺、原、攻撃は最大の防御とばかり、得意の一本背負に足技をから